

<エッセイ>日文研思い出のあれこれ

著者	パウエル ブライアン
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	131-134
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006705

<エッセイ>日文研思い出のあれこれ

著者	パウエル ブライアン
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	131-134
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006705

日文研思い出のあれこれ

ブライアン・パウエル

私の日文研の思い出はずいぶん昔にさかのぼる。初めの方の今は少しかすんでいる。最初に訪問したのは建物が完成する前、一九八七年だったと思う。案内してくださったのは横山俊夫京都大学教授で、園田英弘先生と白幡洋三郎先生の二人が日文研の目的について説明してくれたと記憶している。着いた時には既に暗くなっていて、日文研は無人の野の真ん中にあるように思えた。

しかし日文研が日本の話題を研究している外国の大学人、研究者に多くの機会を与えようとしているとはつきりとわかった。翌年の一九八八年、英国日本研究協会（BAJS）の会長に選ばれ、その目的のひとつとして日文研の事業を会員に紹介しようと決心した。国際交流基金のおかげで翌一九八九年、オックスフォードのキープル・カレッジで開かれたBAJSの学会に日本から学者を一人招待することができたので、日文研に適当な学者を派遣していただけないでしょうかと園田先生と相談するように理事会より頼まれた。

今は亡き埴原和郎先生がその時には日文研代表の学者として選ばれてやってきた。当時のBAJS事務長は、彼を非常に礼儀正しい人物で、カレッジ制大学であるオックスフォード大学がどう組織されているのかに興味を示したと記憶している。埴原先生は学会の全体で刺激的な講演を行い、多くのBAJS会員に日文研の仕事と施設について語った。

日文研との次の接触は二〇〇三年のヨーロッパ日本研究協会（E A J S）ワルシャワ大会だった。学会は中欧・東欧の日本研究というテーマのプレ会議から始まった。これはE A J Sでもっと進めるべきだと前々から考えていたことだったので、日文研が共催したのを喜んだ。白幡教授は大観客の前で挨拶し、日文研が中欧・東欧の学者による日本研究に関心を持っていると強く語った。

二〇〇五年にはウィーンでE A J S学会が開催され、過去最大規模の七〇〇名以上の参加者を数えた。この時には日文研は「協力的な環境における独創的な学問 日文研の研究」と英語で銘打ったワークショップを持ち、多くの出席者を集めた。そして白幡先生をリーダーにしたチームが日文研で行われている研究の多様性をうまく伝え、その豊富な電子資料に関する目覚ましい解説を行った。その間E A J Sの会長となった私は、日文研にこの催しを主催する手間をかけていただいたことについて、協会からの感謝の意を表すことができて嬉しかった。

二〇〇六年になってようやく私自身、外国人研究員として六ヶ月間、日文研の研究活動に参加できた。私の印象はそこで研究休暇を取ったことのある世界中の数多い学者の印象と非常に似ていると想像する。まず図書館の資料と有能で協力的な図書館員に驚いた。コモルムのレストランの好意に魅惑された。訪問者の滞在をできるかぎり実り多く、また完璧にしようとするめる信頼おける事務スタッフへの賞賛の気持ちも尽きない。とりわけ日文研教員が立ち上げている研究会が、非常に幅広いテーマをカバーしていることに驚かされた。どの研究会に参加しようか決めるのがむずかしいほど興味深い研究にあふれていた。

私の六ヶ月の研究はいくつもの非常に楽しい外出で区切りをつけられた。たとえば白幡先生と一日田舎を回り、農業の方式を観察し、現在の農民と実際に会ったこと。早川聞多先生のご

招待で、ジョセフ・キブルツ先生と嵐山の川で夜の鵜飼いを見にご一緒したこと、他の客員研究員や事務スタッフが主催する京都市内観光に何度か出かけたこと。その他、三〇分でも時間があれば、日文研を離れてすぐに美しい環境のなかを散歩できた。

客員研究員にとっては、本務校での事務の責任や重荷を忘れていられる天国のようなところだった。もちろんそれは日文研自身の教員とは違う。中心の建物は全員がコモンルームを通らないと個人の研究室に行けないような構造にデザインされたと聞いた。その目的は教授や他の研究者が会議やセミナー以外でも、時々は気楽に会えるようにするため、この建築の特徴を決めた人の頭には、ケンブリッジのカレッジがあったと教えられた。私から見ると、それは日文研ではあまりうまく機能していないように思えた。コモンルームを通るときにほとんど誰もいないことがよくあったからだ。この日文研のコモンルーム文化は、過去二〇年間にオックスフォードでも起きたことのように思う。カレッジの教員はあまりに多忙になったため、コモンルームに立ち寄り、新聞・週刊誌・月刊誌の大きなコレクションを読んだり、同僚とおしゃべりしたり、といったその設備を使いにくくなった。二一世紀の初め、私が所属したオックスフォードのキープル・カレッジでも一日の大部分、コモンルームには人気がなかった。しかし次のような例外もあった。

オックスフォードのカレッジではコモンルームはコモンテーブルによって補なわれている。このコモンテーブルは共同体の感覚強化の重要性を象徴する用語で、無料で簡単な食事がカレッジ所属の教員と研究員にふるまわれている。そこで三〇分以上かける者もいれば、一〇分で済ませる者もいる。しかし全員が同僚とコモンテーブルにつかなくてはならない。食事の一部分と大半に考えられているコーヒーは、コモンルームで食後にならないと出てこない。日文

研滞在の頃、それと似たことがあれば、コモンルームは当初の目的をもっときちんと果たせるだろうと。白幡先生の退任講演では日文研教員が今では事務仕事の重荷に直面していると述べていた。だからくだけた社交の場というコモンルームの役割が非常に低くなっているに違いないと思った。もし何とかしてコモンルームを教員の日々の営みのなかに組み込めたならば、教員も訪問者も利を得ることができるよう。

多くの元客員研究員と同じく、日文研時代を非常に懐かしく思い出している。学者である妻のイレーナともども幸せな思い出に満ちている。三〇周年を心よりお祝いしたい。日文研は学問の世界にあって特別な何かを創造した。いつまでもその仕事が続きますように。

(オックスフォード大学キーブル・カレッジ名誉フェロー)

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）